

◆篠田勝英／評

ジャック・リバル著 原野昇訳

『中世の象徴と文学』

(青山社, 2000年)

〈象徴の森〉へ

アレゴリア(寓意)の文学とミメシス(模倣)の文学という二分法が有効だとしよう。その場合、ヨーロッパ中世文学の作品の多くをアレゴリアの文学の代表と見なすのに異論はあるまい。武勲詩であれ、ロマンであれ、あるいは叙事詩であれ、いたるところに象徴的な意味が隠されていたり、さらには全体の筋立ての裏に何か別の意味や教訓が潜んでいる作品群、だがこうした大小の意味を、当然ながら作者は説明してくれない。筋を追っていただけでは、隠された意味の存在にすら思い至らないことが多いのだ。それでは現代の読者は何を頼りにすればいいか。すぐ思い浮かぶのは H. de Lubac の『中世の注釈』(4巻)や F. de Bruyne の『中世美学研究』(3巻)などの大著だが、これらは(後者は新装版が出たとはいえ)入手も難しいし、参照するのはさらに大仕事だ。そこで「寓意」や「象徴」をキーワードにして図書館や書店の棚を検索してみても、目に付くのは神学や聖書解釈学までを視野に入れた、前記の二著を上回る規模の、重厚長大な、いかにも敷居の高い著作であるか、あるいは「秘教(エゾテリスム)」のレッテルで一括りにされるような、いささか胡散臭いオカルト本めいた出版物であったりすること

が多く、「ロランの歌」やクレチアン・ド・トロワ、あるいはトリスタン伝説に初めて触れた読者を「象徴の森」の中で導いてくれそうな、一般読者向けの手頃なガイドブックはなかなか見つからないのである。

だからこそ今回訳出されたジャック・リバルの著作は、フランス中世文学の諸作品の細部に宿る神々に光をあて、その出自を語ってくれる貴重な資料集といえる。数、色、動植物、名前、場所、時間、事物を各章のテーマとして全七章、12人の敵将の10人が死に、ふたりが生き残ることの意味は何か。白と対比される色は黒か赤か。泉のほわりにはなぜいつも松の木があるのか。こうした問いに著者は的確な解答を節度をもって示し、さらに読み進むと、森と海に共通する象徴的な意味が指摘され、あるいは中世文学の傑作の多くが時間的な円環構造をなしていることなどを読者は教えられる。また手袋や指輪などの象徴的な事物にまつわる記述は、図像学にきわめて近い。

著者は象徴的読解の陥りがちな危険と文献学からの批判を十分承知の上で、中世文学という「寓意のめざした象徴的なエクリチュール」の解きほぐしを慎重に試みる。一見、中世文学の専門家にしか用いない、とっつきにくい研究書に見えるかもしれないが、実は広くヨーロッパ文学全般に通用する、有効射程の長い著作である。惜しむらくは、著者本人が述べるように「紹介の試み」であって、網羅的な「大全」ではないことだろうか。

(しのだ・かつひで)